

# 国連への 勧誘



国際海事機関名誉事務局長  
神戸大学特別顧問  
関水 康司（十九期）



▶IMO本部でのスピーチ

二十七年前、政府から国連の専門機関である国際海事機関（IMO）に派遣されて、家内と二人の子供達を連れて英国ロンドンに向け、成田を飛び立つ時は、密かに胸に期する所がありました。それは、この派遣の機会を得て、全力で仕事に取り

組み、自分の力を国際社会の中で試してみたい、そして、手応えがあればIMOに残り、自分の職業人生をIMOに賭けてみる道を探ってみたいという事でした。

以来、四半世紀以上に渡りIMOで勤務し、二〇一二年の選挙で事務局長に選出され、二〇一五年末に任期満了して、昨年ようやく帰国しました。今は、自然と歴史溢れる、九州の筑後川近くで引退生活を始め、長く離れた日本の生活を家内共々楽しんでいます。

国連の定年は現在のところ六十五歳ですが、将来は七十才になると思います。ですから、仮に四十才で国連に入り務め始めるとなると、定年までには三十年勤務出来ることとなります。広く知られてはいないと思えますが、国連で仕事をすることで大きな魅力のひとつに、手厚い年金があります。国連給与は、国を離れて勤務している時は所得税がかかりませんが、医療保険や教育補助金他の制度を考えると、働いている間は一人前の給与所得があります。私も退職するまでは、実感できなかったのですが、それに加えて、三十

年近く勤務し、最終ポストが部長や事務局次長の様な高位のポストになると、十分な年金も得られます。ただ、これらは報酬です。報酬が働く魅力にはならないでしょう。

国連で働く真の魅力は、自らの国の利益を代表するのではなく、国際社会の利益こそを追求する活動に貢献できる事、国々の利害調整の中で新しい道を提示できる事、より良い社会とは何かをいつも考え、その実現のために、既成の枠を超えた活動ができる事、高い理想と理念を持つて仕事ができる事、特定の個人、団体、国家の利益代表にならず、全体の利益を、グローバルな視点から追求できる事などでしょう。

国連で働く国際公務員の仕事は、政治、経済、社会、技術、人権、国際法の諸分野が絡む複雑な現実の社会を活動の舞台として、より良い国際社会を作ることを目指した創造的な仕事です。活動の舞台は、まさに全世界です。私も、南極の地を踏み、北極海を航海し、全世界の七十カ国の国々を回りましたし、地球規模の課題に挑戦してきました。写真は、インド洋のソマリア海賊対策の一環で、ジブチのゲレ

大統領と地域訓練センター建設の起工式でのものです。事務局長に選挙された二〇一一年の秋、思いもかけず、河地安彦先生からお祝いと激励のメールを頂きました。卒業以来四十三年ぶりのことです。先生は見えてくれたんだなあと思いました。先生からその時頂いた言葉は、事務局長として、「あくまで自分が考える正義」の實現に努めよということでした。この言葉は、事務局長として苦渋の決断を迫られる時、いつも私と共にあり、本当に勇気づけられました。

帰国して、まだ先生にご報告もできないうちに、先生の訃報に接しましたのは本当に悔やまれます。同窓会の吉田会長から、先生のご遺志だから、是非やまなみに寄稿してくれと頼まれた時、躊躇しましたが、先生のご恩もあり、同窓生へ次のメッセージを送るために、ご依頼をお受けしました。

国連は機能しているかというのは、いつも問われることです。国連は無力ではないかとも言われます。でも、国連は弱点と課題を抱えつつも、現在そして将来、人類が抱える様々な問題の解決



▲ジブチ訓練センター起工式の様子

のために、現在考え得る唯一の国を超えた世界組織でしょう。そして、この組織には、参加して貢献しようという熱意のある方であれば誰でも、国連職員として自ら参画できる道が開かれているのです。性別、人種、国籍を問わず、我々人類のすべての人々に開かれているのです。

附属中の同窓会の方、そして特にこれから社会に出て行くとする若い世代の方々の中から、一人でも、二人でも、国連を身近な存在として捉え、将来そこに身を投じて人類のより良い社会を作る活動に携わろうとする方が出て頂きたいものだと思います。

関心のある方は、どうぞご連絡ください。私の経験をお伝えできると幸いです。

# 新たな連携に向けて

神奈川県立光陵高等学校  
校長 小田 貞宏



## 一、緩やかな繋がりから 強い連携へ

光陵高校と横浜国立大学教育学部附属中学校との連携型中高一貫教育校については、これまでの「中・高・大連携によるこれからの教育実践モデル」の成果を踏まえ、今後は、高大接続をより強化し、グローバル・リーダー育成に向け、中・高一貫教育から中・高・大の十年間を見据えた連携型の教育への新たな展開をめざして取り組みます。

二〇一六年一月、神奈川県教育委員会は「県立高校改革実施計画」を公表しました。質の高い教育の充実、学校経営力の向上、再編・統合等の取組という三本の柱を立て、二〇一六年に始まり三期十二年に及ぶ改革の実施計画です。冒頭の文は、実施計画の中にある附属横浜中学校と光陵高校の「連携型中高一貫教育校」についての説明文です。

皆様ご承知のとおり光陵高校は横浜国立大学の附属高校とすることをめざして創立され、創立期においては、生徒数の八割を附属中学校卒業生が占めたそうです。附属高校への途が閉ざされ、立高校として進むことになりましたが、その後も緩やかで良好な関係を保ってきました。ですから横浜国立大学教育人間科学部と神奈川県教育委員会によって二〇〇七年に公表された「中・高・大連携によるこれからの教育実践モデル」の構築実施計画は、その後の横浜国立大学および附属横浜中学校と光陵高校の連携を強固なものとする大きな変化の基盤となりました。そして冒頭にあげた二〇一六年一月発出の実施計画では、これまでの附属横浜中学校と光陵高校の連携を成果あるものと見なした上で、「中・高・大の十年間を見据えた連携型の教育」という、さらなる強化に向けた方向性が示されました。

## 二、連携枠

二〇一二年発行の『やまなみ二号』において、当時の鈴木俊裕光陵高校校長は「平成二十四年度から、横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校との連携型中高一貫校として、附属中学

校の生徒、約四十名を上限として入学して来る予定です。」と記されました。「中・高・大連携によるこれからの教育実践モデル」の構築実施計画に基づき、附属横浜中学校でTOFFYと呼ばれ、光陵高校でKUと呼ばれる課題探究としての総合的な学習の時間をその中心に据え、二〇〇九年から「連携型中高一貫教育校」として教育展開をおこなう、二〇一二年には附属横浜中学校生徒の光陵高校連携枠入学が始まりました。なお五年間の連携枠入学者は、初年度二六名、次いで二八名、三二名、三八名と推移し、二〇一六年に上限の四十名になりました。

## 三、光陵高校の教育活動 と連携枠への期待

「高校においては、連携する中学校から入学した生徒と他の中学校から入学した生徒が、相互により影響を与え合う集団による教育展開を行う。」と「中・高・大連携によるこれからの教育実践モデル」の構築実施計画に記載されています。そこでクラス分けでは、連携枠入学者のみのクラスを構成することはせず、均等にクラス分けをします。連携枠設置の効果とし

て、附属横浜中学校からの生徒については、「中学校で身に付けた確かな学力のさらなる伸長という学習の継続性が、他の中学校からの生徒については「希望する進路の実現につながる充実した教育内容の享受」があげられています。さすがにTOFFYを経験した附属横浜中学校からの生徒のKUにおける優位性は明らかです。一方で、学力検査による入試の準備に努め挑んできた一般枠生徒の学力の高さに、連携枠生徒は驚きを隠せずにいるようです。しかし光陵生の世界は多様さを認め合う世界であり、生徒は、自らの持つているもの、得意としていることを互いに提供し合い、互いを高め合っています。TOFFYの経験があるからこそKUでは新たなテーマ、新たな方法に挑戦して欲しいと考えます。KUだけではなく高校生活のあらゆる場面で、自由闊達に思考し、表現する柔軟さや強さを身に付け、高い進学意思の實現に向かつて挑戦する気概を連携枠生にさらの求めます。社会の急激な変化が取り沙汰され、グローバル化と言えども説明できるように思われる時代だからこそ、翻って足許をしっかりとみつめ、心やさしき社会のリーダーをめざしてほしいと期待します。